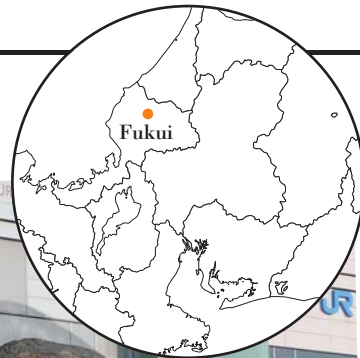


# From福井



## 「恐竜王国」を目指す 福井の挑戦

近年「恐竜王国」の名を高めている福井県。1989年に本格的な発掘調査を開始してから驚くべき成果を上げ、2000年にオープンした福井県立恐竜博物館は年間の入館者数100万人に迫る勢いだ。恐竜王国への道はどう始まり、何をを目指すのか。その足取りに迫ろう。

上／駅前にある恐竜ロボット。左がフクイラプトルで、日本で発見されたものとしては初めて全身骨格が復元された肉食恐竜。右がフクイサウルス



北谷の発掘現場(写真は2007年当時)。地層は約1億2千万年前のものとする



恐竜博物館は、黒川紀章氏の設計。勝山市の「かつやま恐竜の森」内にある

### 勝山の山中で発見される 新たな恐竜の化石の数々

本を手白衣を着た恐竜のキャラクターがベンチに座っている。駅前の広場には、長い首をもたげる巨大な恐竜の像。その傍らには比較的小ぶりの恐竜のロボットが2頭、にらみ合っている。福井駅を訪れる者を待ち受けているのは、そんな驚くべき光景だ。首の長い恐竜はフクイティタン・ニッポネンシス、小ぶりの2頭はフクイサウルス・テトリエンシスとフクイラプトル・キタダニエンシス。いずれも福井市の東、勝山市山中の北谷から発見された恐竜だ。

かつて「恐竜はいない」といわれた日本だが、今では続々と化石が見つかり、全国19の道県で確認されている。そしてそのうちの大多数が福井産。これまで日本国内で学名がついた7種の恐竜

※ のちに自然分野を恐竜博物館へ移管。現歴史博物館

のうち5種を福井が占める。

研究の拠点は発掘現場に近い勝山市にある福井県立恐竜博物館。福井での発掘研究の成果はもちろん、恐竜の分類や生態、さらに地球と生命の歴史に至るまでを展示・解説している。展示している恐竜の全身骨格は世界でも類を見ない44体、しっかり見て回れば1日がかりの充実した内容を誇り、年間90万人の入館者がある。

### 「手取層群」の発掘から始まる 恐竜王国福井への道のり

福井による恐竜発掘と研究は、1982年、勝山市北谷の川岸の崖から中生代白亜紀前期のワニ類の化石ほぼ一体分が発見されたことに始まる。化石が眠っていた「手取層群」は石川県や岐阜県にも分布し、豊富に化石を含むことで知られ、明治初年の昔に日本の地質学・古生物学発展のきっかけとなった地層だった。86年には、勝山市と隣接する石川県白山市の手取層群で中学生の少女が見つけた恐竜の歯が公表されて大きな話題となり、北谷でも恐竜が出るのではとの予測のもと、88年に福井県立博物館(当時)によって予備調査が行われた。

結果は大当たり。小型肉食恐竜の歯の化石などが発見されて、89年からの

本格的な発掘調査へとつながっていく。発掘は、上の上の他の地層を取り去った後、重機を使って岩石をはくように取り外し、大割りしてから丹念に化石を探す「層面法」という独自の手法で、ほぼ5か年単位で4次にわたって行われている。

化石の集中する「ボーンベッド」も掘り当てて、恐竜はもちろん、卵や足あと、哺乳類やカメやワニなどが大量に見つかっている。博物館のスタッフによれば、「発掘現場はかつて河口部か湖だった場所で、恐竜だけでなく様々な生き物の死骸が流れ着き、溜まったと考えられています」。

輝かしい発掘成果の上に立ち、恐竜化石研究の拠点、世界の研究機関と連携した恐竜情報センター、大人も子どもも楽しめる博物館として福井県立恐竜博物館がオープンしたのは、2000年。創設にあたっては、博物館を福井のイメージアップや地域振興や観光振興につなげていく意図もあったという。

「当初から現在のような入館者数を想定していたわけではありません。一気に知名度と人気が高まり、『恐竜王国』のブランド化が進んだのはここ5、6年のことです」と竹内利寿館長は語る。

### ブランドとしての「恐竜」を福井の未来に活かすために

実は福井県では2009年から福井の魅力を発信するため、行政としては異例の「営業」という言葉を使った「観光営業部」を創設。「福井ブランド」の筆頭に「恐竜」を掲げている。

「食や風景にも福井には誇るべきものがたくさんありますが、それは他の県にもあります。ところが恐竜は他の追随を許さない、オンリーワンブランドです。これほどブランドとして強いものはありません」。

以降、県を挙げて恐竜ブランドの確立と発信に力が注がれた。2010年には開館10周年を記念して世界的に価値のある大型草食恐竜カマラサウルスの実物の全身骨格を購入し、プロジェクト

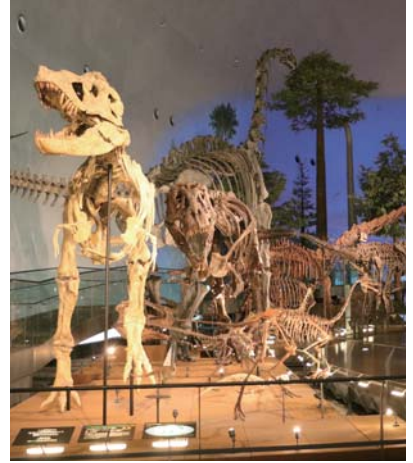
を組んでクリーニングや研究を進めるとともに、全骨格の組上げの様子を公開。マスメディアにも露出をはかった。また、大都市圏で積極的にPR活動を行うなど認知度アップに取り組んでいった。

それまで年間25万～40万人で推移していた入館者数は、2010～12年は50万人台を突破。北陸新幹線の金沢開業の効果も加わり、開業した2015年を挟んで前年に70万人、次の年には90万人を超えている。冒頭で紹介した福井駅の恐竜も、金沢開業の年にこの戦略の一環として作られたものだ。

恐竜博物館では新たな取り組みとして、14年から「野外恐竜博物館」と称した見学・体験イベントをスタートさせた。専用バスで実際の発掘現場へ赴き、解説を聞きながら見学した後、参加者が岩を実際にハンマーで割って化石を探す体験をする。実際の発掘は地質学、古生物学を学ぶ学生や院生が参加できる夏季に行われているが、この体験イベントは4月下旬から11月上旬に実施しており、あつという間に定員になる日も出る盛況だという。

もちろん課題もある。25万人を想定した当初の予想を超えて入館者数が増えたため、施設が手狭になり、バリアフリー面でも対応しきれない部分が出てきた。2022年度末の北陸新幹線県内延伸や、進行中の中部縦貫自動車道整備（県内全線開通すれば名古屋圏とダイレクトに結ばれる）により、さらなる入館者の増加が見込まれるため、第2恐竜博物館（別館）の建設が検討されている。一方で観光目的の入館者の増大に対し、観光の側面と、研究とその成果を発表する場としての博物館の顔を、どうバランスをとるかが問われているところだという。

「来館目的が何であれ、ここへ来たことが恐竜はもちろん地球環境や生命への興味のきっかけになればと思っています。子どもたちから、将来研究者が出るかもしれません。現に『研究者になるにはどうしたらいいか』という問い合わせもある。恐竜博物館が化石の発掘と同時に人材の発掘にもつながっていくことが、何よりの願いです」。



全身骨格が並ぶ様子は壮観だ。レプリカだけでなく、本物も10体ある



フクイラプトルのロボットのリアルな動きに、小さな子が怖がるほど



発掘された化石が丁寧にクリーニングされる様子も、館内で見学できる



第三次発掘で見つかった後に、フクイティタンと命名された恐竜の尺骨



野外恐竜博物館での体験の様子。本格的な体験で、大人も夢中になるという

取材・写真(タイトル写真以外)協力/福井県立恐竜博物館